

# 美術月評

10月

上村豊

も、こうした全国的な流れ 徐々に高まってきたように「伊計島からの手紙」に展覧会の中で、毎年様々な試行錯誤を重ねてきた。昨年から展示エリアも拡張し、特に「Fabric of Housé」は、層根のない宮城島の各地区では、複雑な地形に包み込まれるようにしてある美しい集落のようた、居跡地に絶妙に配置されたから、「地域」の展示と入過去と現在の枠組みや境界を際立たせつつ反転させるような、多義的な空間体験を促す。「珊瑚茶」という

## 文化

### 「場」と人の相互作用 現代芸術へ問題提起 芸術教育の役割期待

アイチハナリ  
柳宗悦と  
沖縄縄  
県立芸大  
教員展

全国で地域密着型のアートプロジェクトが盛んである。こうした「地域アート」の意義を巡っては、多様な立場の「参加者」、アーティスト、地域住民、ボランティア、観客、の間に今までにない形のネットワークやコミュニティが形成されることで、新たな社会の在り方や価値観を生み出す動きとして切実に求められる一方で、ローカルの価値を標榜するはそのこうした価値が全国に乱立することによってグローバル化を押し進めてしまう逆説的な状況もある。最近では、「アートプロジェクト」としての目的や内実、「参加者」それぞれの主体性といった



「アイチハナリ」プロジェクト「アイチハナリ」より津波博覧会「Fabric of Housé」(部分) 平岡昌也「伊計島」(部分) 沖縄県立芸術大学教員作品展「展示風景」

作業などについて、積極的な取り組みを期待したい。沖縄の工芸展「柳宗悦と昭和10年代の沖縄」(9月21日~10月23日・県立博物館・美術館) 日本民藝館との共催により、柳宗悦が日米開戦直前に行った沖縄訪問で収集した染織・陶器・漆器などの工芸品と記録写真、映像による充実した展覧が実現した。その後の激戦でほとんど文化財が失われた現在の沖縄にこれだけのコレクションを顕ることに、歴史の皮肉を感じずにはいられない。それでも「地方文化」でさえ戦争に向けた「国策」に取り込まれていく当時の状況の中、柳が民藝運動や「方言論争」を通して、冷静に信念をもって行



藤本英明展「キンケイエンゲイ」より 「キムホノ式」より

### 技法の限界との格闘 自然な存在感際立つ

藤本英明展  
キムホノ式

つた数々の問題提起は、現設、県立美術館との連携、在の沖縄における「地域とアート」の問題にも直結するものである。沖縄県立芸術大学教員作品展(9月30日~10月10日)・同大付属図書館芸術資料館 教育の場でもグローバル化が推進され、特に地方大学は「大学再編」の波に翻弄される昨今の現実がある。同大でも、十分なはいえない異の教育、文化行政の下、アジア各国との交流、崎山キャンパスの開

た展示から、二つの個展と格闘している。削り出されたイメージの上に新たな筆致が加わった新作にもその痕跡が感じられるが、筆者はむしろ、作家が沖縄での制作を始めた頃に、強い日差しの中、石壁に落ちる影を追いかけた「カベトカゲ」シリーズに見られるような、豊かな両義性をもつた絵画への衝動こそ、矛盾や限界を越える作家本来のポテンシャルがある気がしてならない。キムホノ式/キムホノ展 最後は、今月県内で行われ、

日・陶よりよ、壺屋焼物博物館 旺盛な制作欲で日々、様々なジャンル、形式にわたる膨大な数の作品を生み出し縛ける作家は、自作にいかんぞヒノキも加した(焼物博物館における回顧展において)も全ての作品に「キンケイエンゲイ」が付いていない。彼の作品は、珈琲店や画廊の狭い味のある空間でも、博物館の無機質な展示ケースの中でも、そしてごく普通の家庭の食卓にあっても、いつも自然な存在感をもつてここに在る。そしてそれを観る(使つ)私たちの日常をしばっている色んな制度や先見から、私たちが自身を氣持よく解放してくれるのである。(琉球大学准教授)